歴史は未来の羅針盤

温故知新

今回は、近江日野商人館からお届けします。近江日野商人館では、「景気回復　福助サミット」展を開催するために、福助人形を探しています。ショーウインドー用や貯金箱用など、どのような福助人形でもかまいません。展示にご協力いただける方は、商人館へご連絡をお願いします。

日野商人の出店

日野商人と八幡商人は、江戸時代の初期の頃から登場しましたが、それぞれ商った商品や商法が異なり、江戸時代以来、色々な面で比較されてきました。

出店の様子も大きく違い、「八幡大店、日野千両店」という言葉が、八幡方面で江戸時代から言い伝えられています。

「八幡大店」、つまり八幡商人は、江戸の日本橋のような大都会の目抜き通りに、大きくて豪華な出店を一店舗経営するのが一般的でした。

一方、日野商人は、都会から少し離れた田舎の町に、小規模な出店を経営する傾向がありました。

現在、近江日野商人館となっている山中兵右衛門家の最初の出店は、享保三(一七一八)年に御殿場(静岡)に建てられましたが、次の記録のように、小規模な店であったことがわかります。

享保三年六月　見世(店)建
桁行五間　張三間　勝手之間
九尺二三間　庭二ひさし

日野商人のこのような小規模な出店は、江戸時代の八幡商人によって「千両店（千両もあれば建てられる店）」と皮肉られました。

しかし、日野商人の出店の特徴の一つは、一人の商人が小規模な出店を何店舗も経営したところにあり、それらをチェーンストアのような方法で経営していました。

さらに、出店の数が多かったことも特徴の一つです。これまでの研究によれば、日野商人の出店合計数は二百店ほどとされ、近江商人の中では五個荘商人が最も多く、三百三十店（その内、江戸時代の出店十三店）とされています。

しかし、近江日野商人館による最近の調査では、日野商人の出店数は、江戸時代開店の出店が少なくとも五百十店以上、明治時代の初期から戦前までの出店が三百四十店ほど確認でき、開店時期不明の出店六十店を加え、合計九百店以上の出店数を、現在までに確認しています。

もちろん、これらの出店の全てが同時期に存在していたのではありません。また、これらの出店のほとんどは、ほんの一部の商家にしか残っていない古文書などで確認できたものですが、古文書の残っていない大多数の商家の出店をも含めれば、実際にはもっともっと多かったと推定されます。

先祖が日野商人で、いつの頃か、商い先の土地に移住してしまったという子孫の方が、近江日野商人館へ毎年多く来られます。そんな方々から新発見の出店を教えていただくこともしばしばあり、日野商人の出店確認数は、今なお増加しつつあります。

この九百店余りの出店を現在の都道府県別に分けると、四十七の都道府県の内、二十九の都道府県に及びますが、出店数が多い順に、群馬県が百三十八店（江戸時代開店の出店七十四店）、埼玉県が百十八店（同八十七）、栃木県が百十三店（同八十）、茨城県が六十五店（同四十三）となり、日野商人の出店は、圧倒的に関東方面に多かったことが裏付けられます。

近江日野商人館では、日野商人の九百店余りの出店個々の情報を収集し、具体的に展示していますので、ぜひ一度、お越しください。

▲日野商人の出店（埼玉）

E-mail hino-syounin@rmc.ne.jp